

Title	素顔のサマド・ベヘランギー：革命的作家と田舎教師のあいだ
Author(s)	香川, 優子
Citation	大阪外国語大学学報. 67 p.1-p.18
Issue Date	1984-11-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81023">https://hdl.handle.net/11094/81023</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

素顔のサマド・ベヘランギー  
——革命的作家と田舎教師のあいだ——

香 川 優 子

Samad Behrangi; A "Revolutionary" Writer and Village Teacher  
Yuko Kagawa

Samad Behrangi (1939–1968) has usually been considered a "revolutionary" writer in the context of the anti-Shah movement in the late 1960s and 70s. This definition, however, involves some risk of confusion between political-historical change and literary innovation in Iran.

In this paper, I will be considering his life, thoughts and ideals. This consideration involves his letters and works along with the memorial writings of his intimates.

I. Behrangi as a Revolutionary Writer

After looking at his main works, two representative analyses of foreign scholars on Behrangi are introduced.

II. Chronology of His Life and Works

III. His Philosophy

1. Correspondence

In the letters addressed to his brother and intimate friends, we find his zeal for the new genre of children's literature as well as the solitude and exhaustion of a monotonous village life.

2. Reality (*vāqe'iyat*) and Truth (*haqiqat*)

Behrangi's life and thoughts can be analyzed by two key words; *vāqe'iyat* and *haqiqat*. Poverty, indigenusness and love of the people were the bases of his consciousness of reality which led him to write, and the "scientific truth" was the criterion for his thoughts. Although he died too young for us to judge his true worth, his local standpoint, keen insight of truth, and bold critical powers have made him unique and eternal in modern Iranian literature.

はじめに

1968年8月のサマド・ベヘランギーの不可解な死は、このアゼルバイジャンの田舎教師の名を、一挙にイラン全土に響き渡らせた。小説家、劇作家で、彼と同郷者であるゴラームホセイン・サーエディー（1935－ ）は、若い親友の死を悼んでこう述べている。「サマド・ベヘランギーに

は、誕生日も命日もない。その評伝や伝記を書くことは不可能である。彼の死は、その人生と同じ位信じ難く、その人生は常に、お伽話であるかの如く心躍るものであった」<sup>1)</sup> サーエディーはまた、「(サマドについての)『神話』は、またたく間に最も辺鄙な村々へも伝えられ、老若を問わず、人々の心と魂に影響を与えた」<sup>2)</sup>とも記している。

ベヘランギーの死後数日して、その代表作『ちいさな黒いさかな』が出版されたほか、翌69年には、彼が書きためていた児童文学の作品が友人たちの手で次々と出版され、様々な新聞、雑誌に掲載された論文も、まとめて刊行された。また、農村の教育問題を現場教師の目で鋭く告発した『イランにおける教育問題の研究』(1965年初版)は、1969年4月から約1ヵ月半の間に、二度版を重ねるといふ驚異的な売れ行きをみせた<sup>3)</sup>。そして、1971年には、テヘラン大学でベヘランギー祭が開催されるなど、その知名度はとくに若者を中心に高まる一方であった<sup>4)</sup>。

このようなベヘランギー人気を恐れた当局は、1973年には、国際的名声を博した『ちいさな黒いさかな』を除く彼の全ての作品を発禁とした<sup>5)</sup>。しかし、国外、とくにアメリカでは、反体制派のイラン人留学生を中心に、ベヘランギー作品の翻訳紹介などが、1970年代になって盛んに行なわれた。その後、イスラーム革命成立へと続く一連の変化の中、1978年頃からの言論統制の緩和に伴って、ベヘランギーの名と作品は、再び人々の前に現われることとなった。露店では、彼の肖像を描いたポスターが売られ、『ちいさな黒いさかな』は、テープ付廉価本が販売されたほか、ラジオでも放送された<sup>6)</sup>。また、革命後発売された革命記念写真集には、モサデク元首相やアリー・シャリーアティー、反政府分子として1974年に処刑された詩人ホスロウ・ゴレソルヒーらと共に、「革命の殉教者」として、ベヘランギーの顔写真が見られるのである<sup>7)</sup>。

パハラヴィー朝の崩壊は、1921年に始まったとされるイラン現代文学史にも、おのずからひとつの時代の終焉を認めさせることになった。そして、その60年足らずの歴史の中で、サマド・ベヘランギーは「革命的作家」としての位置を獲得したように見える。だが、ベヘランギーの「革命的メッセージ」を超えて、作家の内面について言及した研究は、殆どないといえる。その意味で、サーエディーのいう「神話」は、生き続けているのである。

そこで本稿では、兄のアサドによって整理された書簡集と友人らの追悼文集を中心にして、サマド・ベヘランギーの日常の情報を集め、その素顔に接近する努力をすることにした。

## I. 「革命的作家」ベヘランギー像

まず、ベヘランギーの著作について概観した後、従来の研究から、革命的作家としてのベヘランギー像をまとめておきたい。

### 1. ベヘランギーの著作

ベヘランギーには、創作児童文学、昔話の整理翻訳、数々の評論、現代トルコ文学の翻訳等、様々な著作があるが、ここでは児童文学と若干の評論を紹介するに留める。

### (1)創作児童文学

サマド・ベヘランギーの創作は、その内容によって5種類に大別することができる<sup>8)</sup>。

- ①現代の農村や都市を舞台に、貧しい子供たちを描いたもの：「ウルドゥズとカラスたち」、「ウルドゥズと口をきく人形」、「ラブー売りの少年」、「ひとつの桃、千の桃」、「テヘランの24時間」の5編。
- ②昔話形式の作品：「愛情物語（クーチュ・アリーと王女）」、「ちいさな黒いさかな」、「塀の上の二匹の猫」、「おばあさんと金のひよこ」等。
- ③アゼルバイジャンの昔話に題材を採ったもの：「タルフーン」、「名なし」、「鳩飼いのキャチャル」、「ケローランと禿のハムゼ」、「ドムルルの物語」等。
- ④教師の日常を描いた随筆風の作品：「慣れ」、「オレンジの皮」等。
- ⑤科学知識の啓蒙を目的としたもの：「雪粒の物語」。

### (2)児童文学について

上記の作品は、「ひからび、凝り固まった教訓」を押しつける従来の児童文学への批判を基に生まれた。ベヘランギーは、1968年に発表した「児童文学宣言」ともいべき文章の中で、次の様に述べている：

なぜ、嘘つきは悪いと言うのだろうか？なぜ、盗みはいけないのだろうか？なぜ、両親に従うことが望ましいと言うのだろうか？なぜ、嘘つきや盗みが現われ、広まり、進んでいった原因を、子供たちに教えようとしなのだろうか？

……右目が左目を欺き、兄が弟を疑い、心に抱いた真実を言葉にすれば災いを免れないような時代にでも、子供たちには正直であれと教えるのだろうか。

……児童文学は、キリスト教的道徳である「友情と人類愛と満足と謙虚」の伝道の上に終始してはならない。子供たちに、反人間的、非人間的で社会の歴史的進化の道の妨げとなる物や人に対しては、すべからず憎しみをもつことを教えなければならない。児童文学は、この憎しみに道を開くべきなのである<sup>9)</sup>。

そして、児童文学のふたつの目的として、①空想や夢に満ちた美しい子供の世界と、暗く苦しい大人の現実の世界とをつなぐ橋となり、子供たちがしっかりした自覚をもって大人の世界にはいり、親を支えて淀んだ社会の変革要因となるのを助けること、②正確な世界観を与え、多様で不安定なモラルに囲まれても、自分なりの価値観を貫ける人間にすることを挙げている<sup>10)</sup>。

### (3)現代文学について

ベヘランギーは現代文学一般についても、様々な場で論じている。ここでは、ゴラームホセイ・サーエディーの『バヤル村の服喪者たち（‘Azādārān - e Bayal’）』（1964）を評した「現代文学について」（1965）<sup>11)</sup>を採り上げてみよう。

彼はまず、テヘランに代表される都市に住む文学者たちが、酒に溺れ、孤独だ暗闇だと嘆きつつ、自分たちの芸術を理解する能力のない無知な民衆を呪う姿を皮肉っている。そして、彼らは

現実から目をそむけているのであり、「地方の町や村を歩き、自ら骨を折って民衆の中に溶け込むことで、誰のために詩をよみ、小説を書いているのかを理解しようとは決してしない」<sup>12)</sup>と糾弾している。

また、小説や演劇については、その殆ど全部が、哲学者ぶった意味不明のシュールレアリスムごっこか、そうでなければ、民衆の日常生活の単純で表面的な描写（一種の写真）に過ぎない、と決めつけている。とくに後者に関して、「日常生活を描く際、芸術とは民俗的資料を集めることとなりと考え、諺と口語表現の詰まった小説をみれば涎を垂らす始末である」<sup>13)</sup>という表現でジャマールザーデ（「あの西洋に住む逃げ腰親父」と表現している）やサーデク・ヘダーヤトを批判している点は、イラン現代文学の弱点を言い当てて妙である。

これに対して、詩人のニーマー・ユーシージュ（1897－1959）やサーエディーは、首都に住みながらも「地方の匂いと気風を守っている」として評価されている。とくにサーエディーには、その民俗誌の執筆活動からも明らかなように、常に民衆と共に在ろうとする姿勢がみられ、その事が彼の精神を豊かにし、その作品を色どりあるものになっている、とベヘランギーは考える。

だが、そのサーエディーも、彼の批判を免れていない。『バヤル村……』を評して、彼はこの作品が農村の現状を良く把握していることは認めながらも、その視点が作家独特の角度をもつために、一般読者には難解に過ぎる、と評するのである。「わかっているのは、もし『社会のための芸術』を信じているなら、そして社会の重要な部分を大衆が構成することを認めるのなら、彼らを見捨てることはできないということなのである」<sup>14)</sup>

#### (4)教育問題

ベヘランギーの名を一気に高めた『イランにおける教育問題の研究』（1965）<sup>15)</sup>は、①序、②良い教師は何故鍊金術に通じているか、③教育視察とその種類、④体罰、⑤教科書の問題点、⑥アゼルバイジャンにおけるペルシア語教育、⑦村と村人、⑧顕微鏡の下で、の8章から成っている。

内容は、あくまでベヘランギーの経験に根差した、農村の教育問題についてが主体で、前半では、米国の教科書を用い、テヘランでもほんの一握りの学校にしか通用しない様な机上の空論を振りまわす教員養成教育が、イランの大多数の新任教师にとって如何に不毛で無駄なものであるかが、豊富な実例によって示されている。第6章のペルシア語教育の問題は、彼がアゼルバイジャン人として折りに触れ主張してきた最も重要なテーマのひとつであり、ここでも具体的な例を挙げて、わかりやすく論じられている。第7章は、長年の農村教師の経験から、農村の実情と、それに即した教育の必要性、農民との付き合い方などが記されている。

ところが第8章だけは、都市に住むホワイトカラーの人々のプチ・ブル根性を扱っており、少し異質の内容をもっている。「教育関係者（farhangiyān）」を彼らの代表的存在であると指摘もしているから、教育批判の矛先を教師の側に向けた、と解釈することもできるが、議論が農村という現場から突然飛躍した観は免れない。ともあれ、ベヘランギーが彼らを「無宗教で、物事を深く考えようとせず、洋画や雑誌、流行歌に現を抜かすアメリカかぶれ」<sup>16)</sup>と評し、社会学者のタキ

ー・モダッレスィーの言葉を引いて、「社会的な生活環境という身体の中の一片の死肉」<sup>17)</sup>と非難しているのは、ジャラル・アーレ＝アフマドのいう「西洋かぶれ人間」<sup>18)</sup>と多く'の共通点を有している点で、興味深い。

## 2. 革命的作家像

従来の研究のうち、ベヘランギーを革命的作家として扱っている最も顕著な例は、Thomas Ricks の “Samad Behrangi and Contemporary Iran: The Artists in Revolutionary Struggle” であろう<sup>19)</sup>。

Ricks の論理の基本は、政治的変革と文学の改革を不可分、というより同一視している点にある。過去200年間のイランの歴史を、「農村—都市下層階級—知識人」と、「王—統治集団—ヨーロッパ連合」との「絶え間ない闘争の歴史」<sup>20)</sup>と見做す彼にとっては、そこから生じる文学も、「政治と闘争の文学」<sup>21)</sup>でしかない。そして、1852年以来120年余りのイラン史を7つの時代に区分し、各時代の政治運動を革命派（労働運動等）が改革派（国民戦線やトゥーデ党）を凌駕する過程として論ずる際にも、民衆の代弁者である「革命的」文学者たちの名が、次々と連なることになるのである<sup>22)</sup>：

1852年—1905年：知識人の抬頭とジャーナリズム、評論、修史の発展。文学者としては Bahār。

1905年—1921年：立憲運動と短編小説形式、革命的作家、芸術家と改革的それとの明確な分極化。Dehkhodā, Jamāl-zādeh。

1921年—1941年：英国の影響とパハラヴィー朝の抬頭、それに伴う革命的詩歌、口承文芸、および短編小説への新たな興味。‘Eshqi, Lāhūti, Bozorg ‘Alavi, Šādeg Hedāyat.

1941年—1953年：第二次立憲運動と、それに伴う作家および政党の分極化の拡大、評論、ジャーナリズム利用の促進。Jalāl Āl-e Aḥmad, Nimā Yūshij。

1953年—1957年：米国の影響力の増大とパハラヴィーの朝の再建、「小雑誌」の発刊と、文学者にとっての詩の重要性。Nimā。

1957年—1963年：S A V A K の抑圧下の政治的実験のゆるみ、不安な経済情勢、『西洋かぶれ』の地下出版。Āl-e Aḥmad, Aḥmad Shāmlū, Nāder Nāderpūr 等。

1963年—1976年：改革派の政策の破綻、組織的武装闘争の発展、および革命的文学の開花。Forūgh Farrokhzād, Āl-e Aḥmad, Sā‘edi, Fereidūn Tonkāboni, Šamad Behrangi。

Ricks のこの分類には、改革派（reformist）と革命派（revolutionary）との文学上の相違が必ずしも明らかでない上、進歩派（progressive）というあいまいな術語も随所に用いられるなど、基本的な術語に混乱がみられる<sup>23)</sup>。

だが、少なくともベヘランギーを、1963年ホルダード月の事件以来、顕著に現われてきた武装革命を目指すグループと関連づけて<sup>24)</sup>、革命派作家の代表的存在と位置づけていることは疑いない。「イランにおける社会経済的、政治的条件の悪化という歴史過程のコンテクストの中でこそ、

我々はサマド・ベヘランギーの作品と思想の分析を始め得る」のであり、ベヘランギーは、「常にイラン内部の変化に対する障害を扱い、社会的政治的矛盾を明らかにした上で、別に採り得る道を示し、その実現のための行動の必要性を説いた」が故に、「革命闘争の中の芸術家」そのものであるというのである<sup>25)</sup>。

従って、ベヘランギーの児童文学の作品も、「鳩飼いのキャチャル」や「ラブー売りの少年」には、資本家対農民、あるいは統治者対農民、「ひとつの桃、千の桃」には、地主対小作の闘争が描かれていると解釈される。小川の終わりを探しに出発し、遂に海に至る「ちいさな黒いさかな」の冒険は、「社会力学に対する知識と自覚の獲得を目的とした寓話」で、仲間を苦しめるアオサギのために生命をかけるさかなの行動は、自己犠牲を伴う闘争を表現している。そして、「テヘランの24時間」で、大切なラクダの人形を奪われた貧しい主人公が切望する「ショーウィンドウの中のおもちゃの機関銃」は、武装闘争の必要性を教えている、と Ricks は分析している。

最後に、ベヘランギーがなした現代文学への貢献について、彼はこう述べている。「イランの大人にも子供にも、教育的、政治的影響を与えようとする彼の児童文学の重要性は、その直截で簡明な表現と、たとえや比喩によって生じる、検閲通過の可能性である」<sup>26)</sup>

同様の見解は、Brad Hanson の“The ‘Westoxication’ of Iran: Depictions and Reactions of Behrangi, Āl-e Ahmad, and Shari’ati”<sup>27)</sup> にも見られる。表題からも明らかなように、これは現代イランを代表する3人の知識人の西洋観を、比較研究した論文である。

この中で Hanson は、ベヘランギーを「左翼的、世俗主義的教師」<sup>28)</sup>のほか、「マルクス主義的革命闘争者」とも呼んでいる。彼を「マルクス主義者」<sup>29)</sup>と規定する根拠は、『イランにおける教育問題の研究』第8章の「階級闘争的視点」に依っている。そして、他の評論（例えば「立憲運動期のアゼルバイジャン」）や、創作の『ちいさな黒いさかな』の叙述から考えて、ベヘランギーは、帝国主義勢力を一掃し、アメリカかぶれのブルジョアたちの病を治療するためには、最終的に武装闘争も必要であると考えていた、と主張している<sup>30)</sup>。

ここで興味深いのは、Hanson がベヘランギーの創作と評論との相違について言及している点である<sup>31)</sup>。即ち、評論の殆どが、教育問題など身近な題材を採り上げて、慎重で経験主義的な結論を導いているのに対して、創作には、闘争、暴力、革命といった過激なテーマが多く見られる、ということである。Hanson は、昔話という親しみやすく、検閲を免れやすい形式を採り得るからこそ、創作の方に彼の革命的傾向を如実に反映した作品が生まれたのだ、と考えているようである<sup>32)</sup>。

## II. 年譜

次に下記の資料に基づいて、ベヘランギーの年譜を作成した。

(1) Āl-e Ahmad, Jalāl (P. Alishan, tr.). “Samad and the Folk Legend,” in Michael C.

Hillmann, ed., *Iranian Society, An Anthology of Writings by Jalāl Āl-e Ahmad*. Lexington: Mazda Publishers, 1982, pp. 134–142.

- (2) Ārām, ‘Abbās. *Kand-o-Kāv dar Āṣār-e Ṣamad Behrangī*. Tehrān, n. d.
- (3) Behrangī, Asad, ed. *Nāmeḥ-hā-ye Ṣamad Behrangī*. Tehrān, 1978/79.
- (4) Behrangī, Ṣamad. *Majmū’eh-ye Maqāleh-hā*. 4th ed. Tehrān, 1980/81.
- (5) Darvishiyān, ‘Ali Ashraf. *Ṣamad Jāvedāneh Shod*. Tehrān, 1977/78.
- (6) Hooglund, E. & M., tr. *The Little Black Fish and Other Modern Persian Stories by Samad Behrangī*. Washington D. C.: Three Continents Press, 1976.
- (7) Jamshidi, Esmā’il. *Zendegi va Marg-e Ṣamad Behrangī*. Tehrān, 1978/79.
- (8) Namini, Ḥ., ed. *Ṣamad Behrangī: Bā Moujḥā-ye Aras beh Daryā Peivast*. Tehrān, 1978.
- (9) Tabrizi, Ḥamid, ed. *Ṣamad Behrangī: Afsāneh’i keh Nātamām Mānd*. Tabriz, 1978.

年譜中の日付は、ペルシア語資料がイランのイスラーム太陽暦による記載であることから、西暦区分では2年または2ヵ月間に渡る結果となることが多い。西暦年号に続く（ ）内が、イスラーム太陽暦による年号である。

著作の欄の略号は各おの、(小)：短編小説、(評)：評論、(訳)：翻訳、(口)：口承文芸、(紀)：紀行文を示している。また、各種評論のうち、掲載誌名、筆名の明らかなものについては、表題の後の（ ）および＜ ＞内に、それぞれ記入した。それらの略号は次の通りである。

(A.): *Mahd-e Āzādi “Ādinah”*, (Ar.): *Ārash*, (B.): *Bāmshād*, (Kh.): *Khūsheh*, (R.K.): *Rahnemā-ye Ketāb*.

＜B.＞: Behrang, ＜B.B.＞: Bābak Bahrāmi, ＜Ch.M.＞: Changiz Mer’āti, ＜D. N. M.＞: Dāriūsh Navvāb Marāghi, ＜S. A.＞: Ṣ. Ādām, ＜Sa. Be.＞: Ṣamad Behrangī (本名), ＜Sād＞: Ṣād. 一, ＜S. B.＞: Ṣ. B., ＜S. Q.＞: Ṣ. Qārānqūsh.

尚、評論や小説は、これ以外にも地方の新聞、雑誌等に様々な形で発表されたと考えられるが、年譜中には、題名、発表年等が明らかなもののみ記さざるを得なかった。



月	ベヘランギーの活動	著	作	社会・文学情勢
1939/40	(1318)	0才		38 イラン縦貫鉄道開通
9	タブリーズ市チャランドープ地区南部に生まれる。 三男三女の次男。父は季節労働者で、生活は苦しく、サマドも幼時から働いていた。父に連れられてテヘランへ〔出稼ぎに?〕行ったこともあった。			41-9 レザー・シャー退位。 モハンマド・レザー・パハラヴィー即位 45-12 アゼルバイジャン自治共和国
1946/47	(1325)	7才		46-2 コルデスタン人民共和国
9	Pānzdahom-e Bahman 小学校入学。 一家は貧乏のために市内を転々とし、何度も転校する。			46-12 両共和国への政府軍攻撃 47-10 ミイ軍事協定 51 ヘダーヤト、パリで自殺 51-5 石油国有化法成立
1952/53	(1331)	13才		52 対英断交
9	Jāvid 小学校卒業後、Tarbiyat 中学校へ入学。 「月給をもらえる職業を」という父の希望に沿って、ベヘランギー家の兄弟は、中等教育を受けた。			52-8 国民議会解散 52 B.アラヴィー『彼女の目』 53-8 モサッデク政権倒れる 政党への弾圧盛ん
1955/56	(1334)	16才		55 第2次7ヵ年計画
9	中学卒業後、タブリーズ初等師範学校入学。 暗記本位の勉強のみに飽き足らず、友人数人と壁新聞『笑い (Khandeh)』作りに熱中。師範学校の体質を批判する。			
1957/58	(1336)	18才		57-3 SAVAK 設立 57 マルドム党、メッリューン党結成
9	師範学校卒業後、規定に従い Āzar-shahr (Deh-Khārqān) 郡 Mamaqān 村の 'Anṣari 小学校へ赴任。 2、3人の同僚と共同生活し、農村における教育について話し合ったり、教材研究などを行なう。 以後、1962年までの5年間を、Qadd-jahān や Mamaqān 等の僻村の小学校で過ごす。			58 アーレ=アフマド『校長』
1959/60	(1338)	20才		59 米国と相互防衛条約締結 // ニーマー・ユーシーージュ死去
冬	処女作「慣れ」、『若人 (Javānān)』誌の懸賞で2等賞を取る。 大学入学資格を得て、タブリーズ大学文学部の二部へ、週数回通う。	冬	(小)「慣れ」	

1961/62 (1340) 22才					
		4	(小)「タルフーン」脱稿	61	アフガーニー『アフ ー・ハーノムの夫』
1962/63 (1341) 23才				62	農地改革法公布
夏	タブリーズ大学文学部英文学科を卒業。			〃	アーレニアフマド『西 洋かぶれ』
9	中学への転勤命令に反発。タブリーズ で待機。			〃	第3次5ヵ年計画
秋	Gāvgān の Aḥmadi 中学校へ赴任。 人事に介入したとして、月給の三分 の一(240トマン)減給。	秋	(評)「アゼルバイジャンの現代 語文法」(R. K.) <Sa. Be.>	63-1	白色革命、国民投票で 承認
1963/64 (1342) 24才					
6	Gāvgān の Sa'di 中学校へ転勤(?)。 同僚は校長代理を含めて4人。サマ ドはアラビア語、ペルシア語、英語 を教えている。傍ら、アゼルバイジ ャンの昔話収集も始めている。 Gāvgān から徒歩15分の Diraj 村で 独居生活。	⅔	(小)「名なし」脱稿	63-6	ホルダード月15日事件 反国王デモで死傷者続 出
		⅔	(小)「タルフーン」(『Ketāb-e Hafteh』誌 vol. 88) <S. Q.>	63-11	ホメイニー、トルコへ 追放
1964/65 (1343) 25才					
10	転任のため、タブリーズで待機中。 共和国トルコ語を習ったり、村々を 回ったりしている。	⅔	(訳)『断片集』初版。	64	サーエディー『バヤル 村の会葬者たち』
11	Ākhir Jān 村の小学校へ赴任(?)。 Āzarshahr まで15分の、120世帯程 の村。教師は2人、生徒は1～4年 の45人。サマドは1年と3年19人の 担任である。村の中に20トマンで部 屋を借りているが、夜は大抵タブリ ーズへ行き、朝早く戻る生活をして いる。	10	(評)「とても幸せな人」 (『Mahd-e Āzādi』紙) <B. B.>	65-1	マンスール首相暗殺 ホヴェイダー内閣成立
1965/66 (1344) 26才					
		⅔	(口)『アゼルバイジャンの昔話』 vol. 1 初版	65-4	シャー暗殺未遂事件
		⅔	(評)「現代文学論考」(B., 60)	65	シャー在位25周年 記念式典
		〃	(紀)「クーハーリー；塩沢地の 村」(B., 58)	〃	モジャーヘディーネ・ ハルク結成
		〃	(紀)「水路に沿って」(B., 65) <S.A.>		
		⅔	(紀)「チーナール」(B., 68) <S. A.>		
		⅔	(評)「サナーイー博士の新計画 の周辺」(B., 69) <S. B.>		

隔週誌『Mahd-e Āzādi “Ādinah”』を数人の友人と刊行。 以後1年間、17号まで発行する。	夏 % // 9-11 秋 // 12 冬 ?	(評)『イランにおける教育問題の研究』初版 (評)「ある著述法」(A.) <<D. N. M.> (評)「イラン人には芸があるものだ」(A.) <Sad> (評)「古代科学と新知識の狭間で」(A.) <Ch. M.> (訳) ‘Aziz Nesin 著『われら、ロバたち』初版 (小)「ウルドゥズとカラスたち」脱稿 (評)「幸福の処方」(A.) (評)「S. Ma. Jād 著『アゼルバイジャン語の文法』について」(R. K.) <Sa. Be.> (評)「アゼルバイジャン現代語の過去および現在進行形について」(『Farhang-e Irān Zamin』 vol. 13)
1966/67 (1345) 27才		
	% // % // 春 % // // % // 秋 ?	(評)「歴史教育について」(A.) <Sād> (評)「『太陽の構造』について」(A.) <Ch. M.> (評)「H. V. Gārūd 著『詩人と評者』」(A.) <B.> (評)「『小学校指導要領』批判」(A.) <Sād> (口)「小話となぞ」初版 (評)「詩と社会」(A.) (評)「文学とアゼルバイジャンの口承文芸」(R. K.) <Sa. Be.> (評)「墓暴きについて」(A.) (評)「世界観」(A.) <Ch. M.> (評)「『五つの脚本』について」(A.) <Sād> (小)「ウルドゥズとカラスたち」初版 (小)「鳩飼いのキャチャル」脱稿
1967/68 (1346) 28才		
10頃 春 グラーム＝ホセイン・サーエディーとジャラル＝アーレ＝アフマド、タブリーズを訪れ、サマドらと交歓。 Khosrou Shāh からテヘランへ上京。 アーレ＝アフマドの紹介で、『アゼル	% %	(評)「作文のしかた」 (『Kashkiyat』 no. 5) <S. A.> (評)「アゼルバイジャンの吟遊詩人」(Kh., 33) <Sād>

66-1	トウーデ党员13人処刑
67-3	モサッデク元首相死去
67-10 67	シャー戴冠式 白色革命三項目追加

	バイジャンの子供のためのペルシア語の初歩』出版を目的に、文盲撲滅運動本部で準備に専念。 テヘラン滞在中にアーレ＝アフマドやサーエディーらと親交を深め、国民的人気のあったレスラーのゴラム＝レザー・タフティーの葬儀に出かけたりもした。	秋 12/12 〃 〃 冬	(小)『ワルドゥズと口をきく人形』初版 (小)『鳩飼いのキャチャル』初版 (小)『ラブー売りの少年』初版 (評)「吟遊詩人サーリー」(Kh., 41) <Sād> (小)『愛情物語(クーチュ・アリーと王女)』初版	67	チューバク『忍耐の石』
1968/69 (1347)	29才				
3項	ペルシア語教科書の出版は思うに任せず、結局タブリーズに戻る。	1/2 〃 1/2 1/2 〃 1/2 夏 〃 〃 〃 〃 8 1/2 〃 1/2	(口)『アゼルバイジャンの昔話』vol.2 初版 (評)「児童文学」(『Negin』, 36) <Be.> (評)「児童文学」(R. K.) <Sa. Be.> (評)「シャハルヤールの『ハイデルンバーバー』の思い出」§.1 (Kh.) (評)「シャー・エスマーイーレ・ハターイー」(Kh.) (小)「オレンジの皮」脱稿 (小)「ひとつの桃、千の桃」脱稿 (小)「テヘランの24時間」脱稿 (小)「ケローランと禿のハムゼ」脱稿 (評)「知性、思考、言語小考」(未発表)<Ch. M.> (小)『ちいさな黒いさかな』初版 (評)「作文のしかた」(『Kārikātūr』9) (評)「シャハルヤールの『ハイデルンバーバー』の思い出」§2 (Kh., 47) (評)「タブリーズ案内」(Ar.) <D. N. M.> (評)「アゼルバイジャンの昔話における英雄の特色」(Ar.)	68	第4次5ヵ年計画
8下	アラス川近辺で昔話採訪中、Khodā-afarin 地区のアラス川で溺死。 享年29才。				
1/2	『Ārash』誌 vol. 2, no. 5, ベヘランギー特集号を組む。	1/2	(評)「アゼルバイジャンの昔話における英雄の特色」(Ar.)		
1969/70 (1348)					
?	『ちいさな黒いさかな』ボローニャ、ブラティスラヴァの国際児童文学祭で受賞。	春 〃 〃 1/2 1/2	(小)『ひとつの桃、千の桃』初版 (小)『テヘランの24時間』初版 (小)『ケローランと禿のハムゼ』初版 (評)『イランにおける教育問題の研究』第3版 (訳)『黒いカラスとそのほかの		

		物語』初版 % (評)『イランにおける教育問題 の研究』第4版 〃 (評)『サマド・ベヘランギー評 論集』初版 〃 (訳)『トルコ語作家小説集』初版	69-9	アーレ＝アフマド死去
1970/71	(1349)			
		? (小)『タルフーンといくつかの 物語』初版		
1971/72	(1350)		71	フェダーイーネ・ハルク結成
?	テヘラン大学でベヘランギー祭開催さ れる。		71-10	建国2500年祭
1973/74	(1352)			
?	『ちいさな黒いさかな』を除くベヘラン ギーの全著作、発禁となる。			
1978/79	(1357)			
		? 『サマド・ベヘランギー書簡集』 初版	79-2	イラン＝イスラーム革 命

### III. 素顔のベヘランギー

#### 1. ベヘランギーの手紙

サマド・ベヘランギーに関する友人たちの文章は、次の様な点で一致している。「サマドは、29年の短い生涯のうち11年を、アゼルバイジャンの農村教師として過ごした。彼は教室だけでなく、茶店、モスク、カーペット工場、結婚式、葬式等、どこへでも出掛けて村人と交わり、老人の昔話に耳を傾け、子供たちに自分の作った物語や、ペルシア語現代詩のトルコ語訳を聞かせた。身なりには無頓着で、いつも黒いコートにブーツをはき、休日には給料をはたいて買った本の袋を抱えて村々を回った。町の本屋や図書館では、本の良し悪しを他人に忠告して回った。小柄でしゃしゃで物静かな普段の彼の姿からは、その筆のもつ激しさは到底想像できなかった」ベヘランギーが下宿していたアーヒールジャー村の茶店の店員は、彼を評してこう語った。「サマドはこの世界の人とは思えません」<sup>33)</sup>

彼の周囲の人々の見た、素朴で地味な村の教師と、その著作から、共産主義者、革命家などと呼ばれる作家との接点は、どこに見出せるのであろうか。ここではまず、ベヘランギーの書簡集から、彼の真情を表わしていると考えられる部分を抜き出してみよう。

#### (1) 教職のよろこび

彼が、小学校教師という職業に如何に情熱を傾けていたかは、幼なじみのユーソフに宛てた手紙の文面に表われている。

…学校というのは、 $1 + 1 = 2$  だとか、 $2 \times 2 = 4$  だとかいった知識だけを教える場ではありません。学校は、子供たちに本当に多くの事を教えることができます。教師は、子供の魂を変えることができるのです。教師の行なう教育に潜む力は、世界を変えることだってできるでしょう。………本当に、教師っていうのがどんなに僕にぴったりの職業かは、口では言えない位です。とくに1年生は本当に好きです。命の続く限り1年生を教えたいと思うほどです。(1961年12月)<sup>34)</sup>

この様な気持ちから、翌年の夏、大学を卒業して、中学校への転勤辞令を受けた際には、教育長に辞令の撤回を願う手紙を提出して処分を受けたりもしている<sup>35)</sup>。

#### (2) 僻村の暮らし、人生への思い

何の縁故も財力もない上、上司に楯突いたベヘランギーは、5年間の義務年限を過ぎても、僻村を転々とする暮らしを続けざるを得なかった。その単調さの生む苦痛は、生半可な理想など寄せつけないほど、厳しいものであったらしい。

……ところで、今年はタブリーズ外での最後の勤務年です。来年はタブリーズで教えたいと思います。………時たまですが、アーザルシャハルに教師が3、4人集まることがあります。そんな夜は、ぐったりする位笑います。どんな些細なことも、大笑いの道具にするのです。………無から何もかも作るのです。ねえ、ユーソフ、もしこんな夜がなかったら、こんな荒れ果てた村では、誰だって死ぬ思いをするってことを信じて下さい。(1961年12月 ユーソフ宛)<sup>36)</sup>

また、兄のアサド宛ての手紙では、カミュの『異邦人』を引いたりしながら、こう語っている：  
……人生というのは、この世に存在するもののうちで一番馬鹿らしく、味気ないものではあるけれど、それに慣れることはできます。そして、存在するもの、しないものに一種無関心であれば、静かに暮らせるのです。……無関心でいる努力をして下さい。ただ、仕事もせずに、ぼんやりしてはいけません。問題は行くことで、着くことではないのです。人生はもつれた糸かせです。どこにも着きっこありません。けれど、立ち止まってはならない。着かないとわかっていても、止まっては駄目です。それで死んだら、死んだ時のことでしょう！（1963年1月）<sup>37)</sup>

### (3)創作について

1967年2月に友人のひとりから来た手紙に、サマドの児童文学を評したものがあつたらしい。これに対して、彼はこんな返事を送っている：

……ともあれ、僕のすばらしい友人である君が、ウルドゥズの物語について語ってくれるのは、僕にとって大変な喜びです。実は、僕の物語を大人も読むかもしれないなどと、思ってみたこともありませんでした。大人には魅力がなく、すぐに飽きてしまうだろうと考えていたのです。

物語の登場人物だとか、象徴の問題については、自分の口から言うことはできません。ただ僕の物語は、村々の通りや市場から、そして僕たちの土地の大人や子供から生まれたのだということは言えます。例えば、ヤーシャールは<sup>38)</sup>、アーヒールジャン村の僕の生徒をモデルに、暮らしや行動や、内面外面の特徴を決めましたし、継母、父親、それにウルドゥズ本人も、長年僕が付き合ってきた人たちの中から選びました。しかし、この人たちは、物語中で得る位置に応じて、別の「意味」を持つかもしれない、持たないかもしれません。この問題は、僕が必要な「意味」を、彼らの存在に対して、どこまで籠められるかにかかっています。けれど、僕自身は、嫌味になりますから、何も言わない方が良いでしょう。僕は、子供たちのためにも物語を書いた、それだけです。読者が、ここはあだ、あそこはこうだ、と言っても、僕としては言うことはありません<sup>39)</sup>。

また、別の教師である友人が、ベヘランギーの物語の感想文を教え子たちに書かせて送ってくれたことに対する返事には、こうある：

……なぜ〔うれしかった〕か、わかりますか？それは、1、2年前には計画でしかなかったことが始まり、実現しようとしているからです。何のことだか、わかりますか？「現実に根差した思考」、つまり真実の言葉を、子供たちを含む「民衆(mardom)」の前に引き出すことです。しかし、この思考は、どんな風に表現すれば、民衆への自然な影響力を持ち得るものになるでしょうか？……これは、タブリーズ在住の文学者にとっては大問題でした。……村の学校の子供たちのことは、常に僕の念頭にありました。僕は11年間、アゼルバイジャンでペルシア語を教えてきたのですからね。いつも考えていたのは、この子たちもいつかは、自分たちの文学を持つべきだということでした。……村やカーペット工場の人なつっこく、親切で、みずばらしい子供たちが、僕を〔大人のためにでない文学を書くという〕もうひとつの道へ導いてく

れました。始めたばかりで、まだ確かな基礎はない道ですが。……始まった道とは、民衆に向かうものです。これは、僕とタブリーズの子供たちが、長年、頭を寄せ合って考え抜いてきた事なのです。(1967年冬頃 テヘランにて)<sup>40)</sup>

## 2. 「現実」と「真実」

ベヘランギーの評論や手紙には、「現実 (vāqe'iyat)」と「真実 (ḥaqiqat)」の二語が頻出して目を引く<sup>41)</sup>。この二語を媒介にして、彼の人生と著作を理解する道は、開けないものだろうか。

彼の人生で常に身近な存在であった「貧困」が、サマドが直面した「現実」の原点であった。人一倍敏感な子供であったサマドが、同級生の中でも目立つ程の貧乏な家庭に育ったことは、彼の進む道を物理的にも精神的にも決定づけることとなった<sup>42)</sup>。物理的には、頭の良い貧乏な子供の採り得る最善の道のひとつが、奨学金をもらって師範学校に入学することであった。そして貧しい村の子供たちの暮らしに、自分の子供時代を重ね合わせて見たところから、彼の問題意識は強く揺り動かされ、創作活動をも始めることになるのである<sup>43)</sup>。

もうひとつの大きな「現実」は、「アゼルバイジャン」という故郷であった。トルコ語という母語を共有する生徒たちに、ペルシア語を国語として教える自分は、アゼルバイジャンの民衆に対して何を為し得るのか、という問いが、彼を民衆の喜怒哀楽の宝庫である口承文芸の世界へと引き寄せた。そして、トルコ語による出版が許されないという状況の下で、この民衆の文化を受け継ぐ、どんな文学を生み出せるのか、がベヘランギーの生涯の課題となる。

そして、このふたつの現実を踏まえて、教師として、また作家として生き、考える時、彼の支えとなったのが、「真実」であった。「彼は何事にも触れ、経験し、味わった。……試みることで、彼の人生の規範であった。それゆえ、何事についても、彼は不信を抱いていた。殆ど全ての規範や問題に対しての不信である」<sup>44)</sup> こうして、経験のふるいにかけて見出した真実のみを、ベヘランギーは信じ、それによって、直面した現実に対応しようとしたのである。

この立場から、彼は科学的真理や理性的判断を重要視していたが、彼の不信は徹底している。「私たちが生きているこの時代は、諸政府の影響力や政治遊戯の裾野が科学や文化にまで広げられた時代である。科学的真理も、『時の政策』に一致するもののみが、民衆に知られるのである」<sup>45)</sup> ベヘランギーが著作中で、宗教を肯定的に捉えていない<sup>46)</sup> ことも、当然の帰結と考えられる。彼が無神論者であったという極論は控えるとしても、少なくともアーレ＝アフマドやシャリーアティーの様に、社会変革の原動力としてのイスラームに期待を抱いていなかったのは確実である<sup>47)</sup>。

彼の創作は、その様な論理性に貫かれているためか、苦い現実の世界を包み隠さず描いているにも拘らず、読者に一種の清涼感さえ与える不思議な魅力を備えている。そして、彼が愛した未来の社会変革の中核たる子供たちは、自由な心を持った主人公として、神ならぬ人の作り出した悪に苦しみ<sup>48)</sup>、その原因を考え、それを正すべく「行動」する。

この「行動」は、しかし、ベヘランギーの意識の中で、武装闘争や革命という政治的活動と直結していたのだろうか。この問題を解く鍵を、筆者は未だ手にしてはいない。ただ、本来であれ



ば創作より著者の政治性が顕著であるべき評論にイデオロギー的色彩が感じられず、Hanson のいう「経験主義的」傾向が支配的である事実は、この見解を否定しないにせよ、積極的に支持できない大きな理由のひとつである。

最後に、ジャラル・アーレ＝アフマドとの比較によって、現代イランの知識人としてのベヘランギーの生涯の特色を考察してみよう。

アーレ＝アフマドは、1940年代、50年代と政治に関わった末、それに絶望する。そして、西洋文明の奔流からイランを救うには、イラン＝イスラーム文化の根源である農村に回帰する以外に道はないと考えた。そこで、テヘランに生まれ育った知識人としては初めて、彼は足繁くイラン各地の農村に通い、民俗誌や農村小説『地の呪い』(1967/68)を書いたりもした。しかし、その努力にも限界があり、アーレ＝アフマドの文学と生涯は、「機械文明に押しつぶされていく、知識人というイラン社会の異邦人」のそれから脱け出すことはなかったのである<sup>49)</sup>。

それに対して、アーレ＝アフマドより16歳若いベヘランギーは、イラン社会がパハラヴィー朝下で一応の安定を見せた時期に青年期を迎え、その行動や著作からも、政治との直接の関係の可能性は希薄である。「地方人」であることにこだわり続けた彼は、アゼルバイジャンという故郷にしっかりと根を下ろしていた。彼にとっては、農村は回帰する場というより、出発点だったのである。そして、誰もが予測しなかった彼の突然の死は、社会の虚偽や矛盾に断固として反発し得る若さと地方性を、永遠にベヘランギーに与えたのである。

カミュの『異邦人』に彼が見出した共感は、「1日でも生きたことのある人間は、何の苦しみもなく、100年だって牢の中で過ごせることがわかりました。なぜなら、飽くことのない思い出を十分持っているからです」という部分であった。「ある意味では、このこと自体が勝利なのです」<sup>50)</sup> というベヘランギーの言葉は、貧困という情け容赦ない現実の支配するアゼルバイジャンの片隅の村から、イランの子供たち全部に向かって曇りのない真実のメッセージを送り続けた田舎教師の、熱情と孤独の錯綜した独白であったろうか。

## おわりに

ベヘランギーは「革命的」作家か、という問いに、否、と答えることはできないであろう。それは、ひとつには、彼の作品が十分その解釈を可能にする内容をもつことに依る。また別の理由として、ベヘランギー自身も語っているように、作家の意図はどうであれ、作品は作家の手を離れた時から一人歩きを始めるから、ということもできる。

筆者が本稿で提起したかったのは、イラン現代文学研究に見られがちな、理論の先行という、後者に関わる問題である。

一般に、第三世界の文学者に共通していえるのは、彼らがその社会の第一級の知識人であるために、各おのの社会が孕む問題抜きで彼らを語ることは不可能であり、文学者自身が政治に直接関与することも多い、という点である。いきおい文学研究の方も、政治的、社会的視野からなき

れることが多くなる。

とくにイランにおいては、1979年2月にイスラーム革命が成立したという事実が、この傾向に拍車をかけ、政治的動機によって文学を解釈したり、あるいは逆に、政治的、歴史的事実の分析に文学を利用したりする研究の傾向が生まれているように思えるのである。そして、この文学の「便利な利用」が、作家や作品の分析に致命的な「先入観」を与える危険性も、否定することはできないのである。ベヘランギーに関する従来の研究には、このような意味で、余りに一面的な分析が多かったのではないだろうか。イスラーム革命も一応の落ち着きを見せた現在、でき得る限り先入観を避け、研究の原点に戻って、作家個人のレベルからの資料を積み重ねることが、一歩でもイラン文学の「真実」に近づく確実な道であると筆者は考えるのである。

(注)

- 1) Gholām-Ḥosein Sā'edi, "Hast Shab, Āri Shab," in Ḥamid Tabrizi, ed., *Ṣamad Behrangi: Afsāneh'i keh Nātamām Mānd*, Tabriz, 1978/79, pp. 28—29.
- 2) Gholām-Ḥosein Sā'edi, "Afsāneh'i tā Dūrtarin Ābādiḥā," in H. Namini, ed., *Ṣamad Behrangi: Bā Moujḥā-ye Aras beh Daryā Peivast*, Tehrān, 1978, p. 42.
- 3) 'Ali Ashraf Darvishiyān, *Ṣamad Jāvedāneh Shod*, Tehrān, 1977/78, p. 7.
- 4) M. & E. Hooglund, "Acknowledgements," *The Little Black Fish and Other Modern Persian Stories by Samad Behrangi*, Washington D. C.: Three Continents Press, 1976, p. xii.
- 5) *ibid.* なお、『ちいさな黒いさかな』は、1979年度のボローニャおよびブラティスラヴァの国際文学祭で受賞した。
- 6) ベヘランギーは生前、自分の本が高過ぎて、貧乏な子供たちの手にはいりにくいことを嘆いていた (Asad Behrangi, ed., *Nāmeḥ-hā-ye Ṣamad Behrangi*, Tehrān, 1978/79, p. 11.)。
- 7) S. Ṣamadiyān & P. Zamāni, *Enqelāb beh Ravāyat-e Taṣvīr*, n. p., n. d. pp. 4-5.
- 8) このうち邦訳があるのは、次の3点である：岩見隆訳「ラブー売りの少年」『通信』47 東京外国語大学 A. A. 研 1983年 pp. 24—27, 香川訳「テヘランの24時間」『現代アジア政治における地域と民衆』大阪外国語大学アジア研究会 1983年 pp. 251—270, 香川訳『ちいさな黒いさかな』ほるぷ出版 1984年。また、この5種類の分類のうち、④は読者として大人を想定していた可能性も大きい。
- 9) Ṣ. Behrangi, "Adabiyāt-e Kūdākān," *Majmū'eh-ye Maqāleh-hā*, Tehrān, 1979/80, pp. 121—124.
- 10) *ibid.*, pp. 122—123.
- 11) Ṣ. Behrangi, "Nazari beh Adabiyāt-e Emrūz," *Majmū'eh-ye Maqāleh-hā*, pp. 105—119.
- 12) *ibid.*, p. 106.
- 13) *ibid.*, p. 107.
- 14) *ibid.*, p. 119.
- 15) Ṣ. Behrangi, *Kand-o-Kāv dar Maṣā'el-e Tarbiyati-ye Irān*, Tehrān, n. d.
- 16) *ibid.*, pp. 113—118.
- 17) *ibid.*, p. 111.
- 18) 詳しくは、香川優子「ジャラルール・アーレニアフマド論——現代イラン作家の肖像——」『アジア・アフリカ言語文化研究』vol. 25 東京外国語大学 A A 研 1983年 pp. 114—118 参照。
- 19) Thomas Ricks, "Samad Behrangi and Contemporary Iran: The Artists in Revolutionary Struggle,"

- in Hooglund, tr., op. cit., pp. 95–126.
- 20) *ibid.*, p. 98.
- 21) *ibid.*, p. 100.
- 22) *ibid.*, pp. 115–116.
- 23) 例えば, 'Eshqi について述べた部分では, 同一頁内に, 彼の名が *revolutionary* と *progressive* の形容詞を冠して二度登場する (P. 102)。が, もっと根本的に困惑を誘うのは, *reformist* の実例が見えないため, その内容があやふやなまま終わっている点である。
- 24) サマド・ベヘランギーと, フェダーイーネ・ハルク等のゲリラ・グループとの関連は, しばしば指摘されるが, 少なくとも存命中に彼がこの種の発言をした事実は, 今のところ見当たらない。ただ, ベヘランギーの親友で, 一緒に昔話や諺の整理などをしたベヘルズ・デヘカーニー (タブリーズィー) と見られる人物が, 1968年のフェダーイーネ・ハルクの結成時に, タブリーズ支部の主要メンバーであったという記録は存在する。(加納弘勝・駒野欽一 『イラン1940–1980——現地資料が語る40年——』 中東調査会 1982年 p.175.)
- 25) Ricks, op. cit., p. 116.
- 26) *ibid.*, p. 123.
- 27) Brad Hanson, "The 'Westonxication' of Iran: Depictions and Reactions of Behrangi, Āl-e Ahmad, and Shari 'ati," *International Journal of Middle Eastern Studies*, XV, 1, 1983, pp. 1–23.
- 28) *ibid.*, p. 1.
- 29) *ibid.*, p. 19.
- 30) *ibid.*, pp. 4–7.
- 31) *ibid.*, p. 7.
- 32) *ibid.*, p. 3.
- 33) Behrūz Tabrizi, "Afsāneh-ye Mohabbat," in Ḥamid Tabrizi, ed., op. cit., p. 8.
- 34) Asad Behrangi, ed., op. cit., p. 43.
- 35) *ibid.*, pp. 23–25.
- 36) *ibid.*, p. 44.
- 37) *ibid.*, pp. 33–34.
- 38) 物語中のウルドゥズの友だちの名前。
- 39) Asad Behrangi, ed., op. cit., pp. 13–14.
- 40) *ibid.*, pp. 15–16.
- 41) 本稿中にこの二語を引用する場合は, 傍点を打った。
- 42) Darvishiyān, op. cit., p. 41. また, ベヘランギーの処女作で, 教師としての体験をそのまま描いたと思われる「慣れ」(1956/60) にも, 特に望んで教師になったのではないという, 自分の気持ちを書いている (Behrangi, "'Ādat," *Talkhūn va Chand Qesseh-ye Digar*, Tehrān, 1977/78, p. 43.)。
- 43) Darvishiyān, op. cit., p. 41.
- 44) Gholām - Hosein Sā'edi, "Hast Shab, Āri Shab," in Ḥ. Tabrizi, ed., op. cit., pp. 29–30.
- 45) Ṣ. Behrangi, "Barrasi - ye Ketāb - e' Sākhtemān - e Khorshid' va Harfhā - ye Digar, "*Majmū'eh-ye Maqāleh - hā*, p. 93.
- 46) 例えば, 「世界観」と題した評論中では, キリスト教が人と知識の樹との間の障害であったことを指摘している。この種の記述は多い (Ṣ. Behrangi, "Shenākht-e Jahān", *Majmū'eh-ye Maqāleh - hā*, p. 56.)。
- 47) Hanson, op. cit. に詳しい。
- 48) Asad Behrangi, ed., op. cit., p. 33.
- 49) 香川「ジャラル・アーレ＝アフマド論」P. 136.
- 50)\* Asad Behrangi, ed., op. cit., p. 35.